

『いはでしのぶ』 典拠攷—韻文編— (卷三～八, 冷泉家本)

横 溝 博

〔凡例〕

- 一 本稿は『いはでしのぶ』（推定全八巻）に確認できる引歌・引詩及び詩歌に典拠を有すとおぼしき表現を集成するために、本歌乃至は関係する参考詩歌を、物語の進行順に指摘したものである。
- 一 『いはでしのぶ』本文は、小木喬著『いはでしのぶ物語 本文と研究』（笠間書院、1977年。以下『本文と研究』と略す）を参照し、該当ページ数を付した。本文は影印等に拠り、底本のママとするが、適宜濁点・読点を付し校異を付すなどした。また他本による本文の補入は（ ）で示した。冷泉家本については、『冷泉家時雨亭叢書 源家長日記・いはでしのぶ・撰集抄』（朝日新聞社、1997年）の影印に拠り、該当丁数表裏を示した。
- 一 和歌の引用は、角川書店『新編国歌大観』に拠り、番号も同書に従うが、紙幅の都合上、詞書等は適宜省略し、作者名表記も簡略化している。また表記も変えたところがある。
- 一 上記以外の作品については、通行のテキストを用いることとし、出典表記を略した場合がある。
- 一 和歌の掲出は基本的に勅撰集を第一としたが、他出のある場合はこれも適宜示した。
- 一 ▼は確実な典拠と目されるもの、▽は典拠とは見なすには躊躇されるが参考歌として無視がたいものである。適宜※印を付して簡略なコメントを付した。また〔参考〕として表現が類似する歌や散文の例などを掲げた。
- 一 『いはでしのぶ』の典拠に関わる先行研究として、前掲小木喬著書のほか、三角洋一氏による『鎌倉時代物語集成 別巻』（市古貞次・三角洋一編、笠間書院、2001年。以下『別巻』と略す）があり、それぞれで指摘のあるものについて【小】【三】として示した。無記号は稿者があらたに加えた指摘である。但し【小】【三】いずれも稿者が吟味した上、▼もしくは▽の記号を付した。なお、『別巻』に冷泉家本は含まれていない。
- 一 作中歌については、本稿の姉妹編として『『いはでしのぶ』典拠攷（作中歌編）』を予定している。
- 一 本稿に関わる拙論に、『『いはでしのぶ』文体論序説—中世の歌ことば表現をめぐって—』（『平安朝文学研究』復刊第12号、2003年12月）がある。また近年の解題として足立繭子『いはでしのぶ』（『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版、2004年所収）があり参照されたい。
- 一 本稿は2005年に成稿し早稲田大学に博士課程学位論文の一部として提出した原データに基づく。遺漏もあり付け加えるべき点もあるかと思うが、すべては「考察編（成立論）」の稿を起す時に採用することとし、いまは大方の批正を俟つこととする。
- 一 本稿の発表は永井和子氏（学習院女子大学名誉教授）及び笠間書院の徳憑に拠るところが大きい。記して謝意を表する次第である。

卷三

1. ゆめかうつつかあさつゆのおきわかれたまいしあか月の空は（449）

▼ほととぎす夢かうつつか朝露のおきて別れし暁のこゑ

(古今・恋三・641・読人しらず)

2. あか月の空は、げにうき物なりけりと (449)

▼有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし【小】【三】

(古今・恋三・625・題しらず・壬生忠岑)

3. いへばたゞはなかつみなる恋のけぶり (449)

▼みちのくのあさかのぬまの花かつみかつ見る人にこひやわたらむ【小】【三】

(古今・恋四・677〈巻頭〉・題しらず・よみ人しらず)

4. くさのはらさへ露ふかく、みちとぢはてぬる心ちしたまいつつ (449)

▽うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をばとはじとや思ふ

(源氏物語・花宴卷・427)

▽尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露【三】

(狭衣物語・卷二・45・狭衣)

5. しげきみやまのあをつゞら、とのみなげかれ給ふも (449)

▼ひとめのみしげきみやまのあをつづらくるしきよをぞおもひわびぬる【小】【三】

(後拾遺・恋二・692・兼仲朝臣のすみはべりけるときしのびたる人かずかずにあふことかたくはべりければよめる・高階章行朝臣女子)

6. しのぶおもひの下こがれは、むねにあまるこゝろちするも (451)

▽なにはめのすくもたく火のしたこがれうへはつれなきわがみなりけり【三】

(千載・恋一・665・題しらず・清輔)

7. 思ひのあまりには、何のひじりとかやだに、まつのとぼそをたち出ゝ、てにとるからに、とこそいひて心もなぐさめけれ (451)

※後文にも「藤衣、露なれたる松のとぼそのうちに」(卷四・551)とある。▼奥山の松のとぼそをまれにあけてまだ見ぬ花の顔を見るかな【三】

(源氏物語・若紫卷・53・聖)

※『別巻』は次の歌を参考として挙げる。

七十のよはひを娘の賀し侍りける時、中宮行啓など侍りけるによみ侍りける

寢覚の入道太政大臣

▽今はとてとほそとちてし草の庵にさやけき空の光をぞ見る (風葉・雑三・1408)

▽まつのとほそをとちこもりたるひじりども、 (浅茅が露・76 才)

※「松のとほそ」は『源氏物語』から出た中世の歌語。

▽暮れはつる松のとほその雪のうちを春こそ知らね君だにもとへ

(玄玉集・454・俊成)

※「てにとるからに」は『俊頼髓脳』『古来風体抄』『和歌色葉』等に収載の志賀寺の僧の説話による。

▼はつ春の初子の今日の玉ばはき手にとるからにゆらく玉の緒【小】【三】

(新古今・賀・708・題しらず・よみ人しらず)(古今六帖・歳時・子日・36・大伴家持)

8. 千たびやゝしのび返しつゝ (451)

※『別巻』は次の歌を参考として挙げる。

▽たがためにいかにうてばかから衣ちたびやちたび声のうらむる【三】

(千載・秋下・341・堀河院御時、百首歌たてまつりける時、擣衣のころをよみ侍りける・藤原基俊)

9. いつかたにつけてもかことはなれず、あはれにおしはかりきこ糸給て (451)

※『別巻』は次の例を挙げる。

「古代の歌詠みは、唐衣、袂濡るるかことこそ離れねな」【三】 (源氏物語・玉鬘卷)

10. そでのみかさまさりて、たへがたうながめわび給へる (451)

※『別巻』は次の歌を参考として挙げる。

▽つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまさりて【三】

(源氏物語・浮舟卷・749・浮舟)

11. みさへながれぬとも、たれかたづね侍らん (452)

▼あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへ流るときかばたのまむ【小】【三】

(古今・恋三・618・かの女にかはりて返しによめる・業平) (伊勢物語・一〇七段)

12. ちりだにすへず, たまのうてなに (452)

▼ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしよりいもとわがぬるとこ夏のはな【三】

(古今・夏・167・となりよりとこなつの花をこひにおこせたりければ, をしみてこのうたをよみてつかはしける・躬恒)

13. あらそひおつるのきのたまみづも (452)

※「のきのたまみづ」は次の歌が初出。中世以降に用例が集中する。

▼雨やまぬのきの玉水かずしらず恋しき事のまさるころかな【三】

(後撰・恋一・578・平兼盛)

[参考]

▽つくづくと春のながめのさびしきはしのぶにつたふ檐の玉水

(新古今・春上・64・閑中春雨といふことを・大僧正行慶)

▽ひとりのみおもふ心のさみだれにちぢにくだる軒の玉水

(洞院摂政家百首・夏・441・正三位知家)

▽ひとりのみながむるやどの五月雨にとはずがたりの軒の玉水

(洞院摂政家百首・夏・499・但馬)

▽たえだえに軒の玉水おとづれてなくさめがたき春のふる里

(式子内親王集・又春・117)

▽五月雨の雲はひとつにとちはててぬきみだれたる軒の玉水

(式子内親王集・夏・228)

14. あらばあふ夜, ともおぼせかし (456)

▼いかにしてしばしわすれんいのちだにあらばあふよのありもこそすれ【小】【三】

(拾遺・恋一・646・題しらず・よみ人しらず)

※前出・卷二「あらばあふよをまつべきみのゆくすゑも」(396)

15. ほととぎす二こゑばかりなのりてすぐ (456)

※「郭公の二声ばかり鳴きてわたる」(源氏物語・蜻蛉卷)によるか。

16. よそふるからのなつかしさ (456)

〔参考〕

▽橘のかをりし袖によそふればかはれるみとも思ほえぬかな【三】

(源氏物語・胡蝶巻・369・光源氏)

▽袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ【三】

(源氏物語・胡蝶巻・370・玉鬘)

※「なつかしさ」は、「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」(源氏物語・花散里巻・168・光源氏) から出ていよう。

17. かはらぬおもかげも、いかばかりみねば恋しきや (456)

▼あはざりし時いかなりし物とてかただいまのまも見ねば恋しき【三】

(後撰・恋一・563・題しらず・よみ人しらず)

※前出、巻二 114. 「げにみねば恋しうもあるものにこそなど」(437)

18. 神世のことともいひ侍る人もあらんこそ、からかりぬべけれ (459)

▽大原や小塩の山も今日こそは神代のこともおもひいづらめ【三】

(伊勢物語・七六段)

▽住吉の松こそものは悲しけれ神代のことをかけて思へば

(源氏物語・濡標巻・258・惟光)

▽しめのうちは昔にあらぬこちして神代のことも今ぞ恋しき

(源氏物語・絵合巻・282・秋好)

▽ちはやぶる神代のこと人も人ならば問はましものを白菊の花 (千載・賀・621・実行)

※いづれに拠っても典拠を決しがたい。

19. 秋といふなもわきて身にしむかぜの音に (462)

▼白妙の袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風ぞ吹く【小】【三】

(新古今・恋五・1336・水無瀬恋十五首歌合に・定家)

20. すゑはの露もよそならず (462)

▼くるるまも待つべきよかはあだしの末葉の露に嵐立つなり【小】

(新古今・雑下・1847・百首歌に・式子内親王)

21. 秋風袖もみつなみだ、とひとりごちつゝ (464)

▼長夜に君先づ去りんたり 残んの年我れ幾何ぞ 秋の風に襟涙に満つ 泉下に故人多し【小】【三】
(和漢朗詠集・懐旧・742・白楽天)

〔参考〕「せんかに古人おほし、とひとりごちて」【三】 (風に紅葉・巻二)

22. おもふことなげにひもときわたりて侍る花の色へこそ (466)

▼ももくさの花のひもとく秋ののを思ひたはれむ人などがめそ【三】
(古今・秋上・246・題しらず・よみ人しらず)▼秋の野の花の色色とりすゑてわが衣手にうつしてしかな【三】
(拾遺・雑秋・1099・題しらず・よみ人しらず)

23. とし月ふちせとわかぬ心の中くるしうわびしきをも (467)

▼たきつせのなかにもよどはありてふをなどわがこひのふちせともなき【小】
(古今・恋一・493・題しらず・よみ人しらず)▽あすかがはふちはせになる世なりとも思ひそめてむ人はわすれじ【三】
(古今・恋四・687・題しらず・よみ人しらず)

24. 人の世のはかなさは、げにおとらずしもあらじを (469)

▼あさがほを何はかなしと思ひけん人をも花はさこそ見るらめ【三】
(拾遺・哀傷・1283・あさがほの花を人のもとにつかはすとて・藤原道信) (和漢朗詠集・秋・権・294)

※朝顔の花を前にしてのことばであるから、右の歌によるのであろう。ただ小木氏もいうように、二重否定の文ではおかしいようである。

25. はつ花ぞめの、とかゝれさせ給ぬるも (473)

▼紅のはつ花ぞめの色ふかく思ひし心我わすれめや【小】【三】
(古今・恋四・723・題しらず・よみ人しらず)

26. 時雨もまたぬこのはは、もろきなみだにたぐひおちつゝ (474)

〔参考〕

▽秋といへばいはたのをののははそ原時雨もまたず紅葉しにけり【三】

(千載・秋下・368・題しらず・覚盛法師)

▽うつり行く人のこころの秋のいろにしぐれもまたずぬるるそでかな【三】

(風につれなき・上・1・藤壺)(風葉・恋五・1131)

27. 思ひしほどにはかなくて、などしのびやかにうちずんじ給つゝ (474)

▼物をのみ思ひしほどにはかなくて浅茅が末に世はなりにけり【小】【三】

(後拾遺・雑三・1007・世中つねなく侍りける頃よめる・和泉式部)(和泉式部集)

※前出、卷二3。「あさちがすゑとうらがれわたりつつ」(271)

28. 出なんとしたまへど、まけずとまる心のわりなさ (477)

▽おもふには忍ぶる事ぞまけにける色にはいでじとおもひしものを【三】

(古今・恋一・503・題しらず・よみ人しらず)

29. ふくるまで月のかほゝまぼりつゝ、ちゞに物のみかなしく (477)

▼月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど【三】

(古今・秋上・193・これさだのみこの家の歌合によめる・大江千里)

30. 月すさまじう風秋なり、とゆるらかにうちずんじ給へる (477)

▼更闌け夜静かなり 長門闕として開けず 月冷じく風秋なり 団扇杳として共に絶えぬ【小】【三】

(和漢朗詠集・雑・恋・779・張文成)

31. げに、かわらずながら、いま一たびみでややみなん (478)

※「みてややみなん」と清むべきか。

▽よそにのみ見てややみなんかづらきやたかまの山の嶺のしら雲【三】

(新古今・恋一・990<巻頭>・題しらず・よみ人しらず)(和漢朗詠集・雲・409・第三句「かづらきの」)

32. げにかかれとてしも，となみだのみきりふたがりつゝ（478）

▼たらちめはかかれとてしもむばたまのわがくろかみをなでずや有りけん【三】

（後撰・雑三・1240・はじめてかしらおろし侍りける時，ものにかきつけ侍りける・遍昭）

33. かぜにまかせてあるよりも，などてならひにしつゝ（490）

▼もみぢばを風にまかせて見るよりもはかなき物はいのちなりけり【小】【三】

（古今・哀傷・859・やまひにわづらひ侍りける秋，心地のたのもしげなくおぼえければよみて人のもとにつかはしける・大江千里）

34. めのまへにかへたらば，いかにさまよく（490）

▼をしからぬ命にかへて目の前の別れをしばしとどめてしかな

（源氏物語・須磨卷・186・紫の上）

35. なかばいづみにかへる，など何となきふる事を（493）

▼往時眇茫として都て夢に似たり 旧遊零落して半ば泉に帰す【小】【三】

（和漢朗詠集・雑・怀旧・743・白楽天）

36. をひのなみだは一たびこじんの文にそゝく，とかいひおきたるを（493）

▼黄壤に誰か我を知らむ 白頭にしてなほ君を憶ふ ただ老年の涙をもつて 一たび故人の文に灑く【小】【三】

（和漢朗詠集・怀旧・741・白楽天）

〔参考〕「老いの涙の袖の時雨は晴れ間なく」（風に紅葉・卷一）【三】

37. なにゝしのぶの露のあはれ，つきすべくもあらず（500）

▼結び置し形見のこだになかりせば何に忍の草をつままし【小】

（後撰・雑二・1187・詞書略・兼忠朝臣の母の乳母）

卷四

1. いとどみねのかすみのはれまなく（507）

▼雁かへる嶺のかすみの晴れずのみうらみつきせぬ春の夜の月

（新千載・雑上・1689・千五百番歌合に・後鳥羽院御製）

▽ふる里を峰の霞は隔つれどながむる空は同じ雲居くもみか【三】

(源氏物語・須磨巻188・光源氏)

※「二月のついたちごろとあれば、ほど近くなるままに、花の木どものけしきばむものこりゆかしく、峰の霞の立つを見捨てむことも、おのが常世にてだにあらぬ旅寝にて、いかにはしたなく人笑はれなることもこそ、などよろづにつつましく、心一つに思ひ明かし暮らしたまふ。」(源氏物語・早蕨巻) →前出巻二34.「おのがとこよならぬたびのそらは」(340)

2. わすれがた身に露もらしそへつゝ (507)

▽飽かてこそ思はむ仲は離れなめそをだに後の忘れがたみに【三】

(古今・恋四・717・よみ人しらず)

3. そらのけしき、にほひ色にかすみわたりて、風のどやかにうちふきたるに (507)

▽遠近のにほひは色にしられけりまきの戸過ぐる梅のした風

(新続古今・春上・72・定家)(拾遺愚草・1884)

4. いけのみぎわによせかへるなみのおと、春をしらせがほなるにつけても (507)

▼浪の音の今朝から異にきこゆるは春のしらべや改まるらむ

(古今・物名・456・安倍清行)

5. げにぞこればかりはふきとくかぜもありがたかりけるや (508)

▼袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ【小】

(古今・春上・2・はるたちける日よめる・紀貫之)

▽山風に霞吹きとく声はあれど隔てて見ゆるをちの白波【三】

(源氏物語・権本巻・632・八の宮)

6. ちぎりなき物とかいひおきたるむめのにほひの、まつにはあらぬしも (508)

※小木氏は次の歌を典拠として挙げるが如何。『別巻』も同じ。

▽はるの月かすめるそらのむめがかにちぎりもおかぬひとぞまたる【小】【三】

(新勅撰・雑一・1037・百首歌よみ侍りけるはるのうた・具定)

また、つづけて、「まつにはあらぬしも」に関連して次の歌を挙げる。

▽やどちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人のかにあやまたれけり【小】

(古今・春上・34・題しらず・よみ人しらず)

しかし、典拠としては次の歌が適当であろう。

▼色かをば思ひも入れず梅の花つねならぬ世によそへてぞ見る

(新古今・雑上・1445・むめのはなを見たまひて・花山院)

そもそも『和漢朗詠集』・春・紅梅・101に載る。また『古今著聞集』にも説話が見える。「ちぎりなき物」とは無常観をいうのであろう。あるいは『更級日記』における継母と作者の関係を説話的に踏まえるか。源具定の歌も『更級日記』を踏まえるか。

7. よそふるこきはいま一しほなるを (508)

▼色もかも昔のこさににはへどもうゑけむ人の影ぞこひしき【小】

(古今・哀傷・851・あるじ身まかりにける人の家の梅花を見てよめる・貫之)

8. おなじねとや、うぐいすのわかやかにうちなきたるに (508)

※「おなじ音」は、小木氏も「引歌がありそうだが見当らない」とする。

[参考]

▽むめがえのこぞのやどりをたづねきてなくねもおなじはるのうぐひす

(雅有集・春・288)

▽ものごとにあらたまれども春をへておなじねにのみうぐひすのなく

(嘉喜門院集・春・9)

※『別巻』は「同じ根」と解して次の歌を挙げる。

▽梅花おなじ根よりは生ひながらいかなる枝の咲きおくるらむ【三】

(袋草紙・雑談・藤原清輔) (清輔集・春・梅・17) (久安百首・908) (十訓抄)

9. 雪のうちといふばかりに、さきこぼれにほひみちしもおぼしいでられて (508)

▼雪の内に春はきにけりうぐひすのこぼれる涙今やとくらむ【三】

(古今・春上・4・二条のきさきのはるのはじめの御うた・よみ人しらず)

10. さばかりあいがたき身をうけて、又や六道にたゞよふべきと (514)

▼如是無量生死之中、得人身甚難……縦遇仏教、生信心亦難【三】

(往生要集・大文一ノ七)

[参考]

▽うけがたき人のすがたにうかびいでてこりずや誰も又しづむべき【三】

(新古今・雑下・1751・題しらず・西行)

※小木氏は「人身は受け難く、仏教にはあひがたし…」(平家物語・卷一・祇王)を挙げるが、これも『往生要集』の文による。

11. いますこしふかきみねにまかりこもるべく (516)

▽郭公ふかき峰よりいでにけり外山のすそに声のおちくる

(新古今・夏・218・西行)(西行法師家集・151)

※後出26。「おとゞもいまはふかきみねにうつろひ給なんかし」(528)。勅撰集中「ふかきみね」は上の歌のみ。

12. さだめかねたる御心さわぎのあやしければ (519)

▽伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる【三】

(古今・恋一・509・題しらず・よみ人しらず)

13. ゆめのうきはしとだへてやむべき事は、くちをしく恋しかるべき心ちなり (522)

▼春の夜の夢の浮き橋とだえして嶺にわかるる横雲の空【小】【三】

(新古今・春上・38・守覚法親王五十首の歌よませ侍けるに・藤原定家)

14. 又かのおとは山おとにのみあらぬ心の中 (525)

▼おとは山おとにききつつ相坂の関のこなたに年をふるかな【小】

(古今・恋一・473・題しらず・在原元方)

15. 一もとゆへとばかり思ひ侍るもあはれならずや (525)

▼紫のひともとゆへに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る【小】【三】

(古今・雑上・867・題しらず・読人しらず)

16. と此山なり, とくちかため給へるもにくからず (526)

▼いぬがみのとこの山なるなとり河いさとこたへよわがなもらすな 【小】 【三】

(古今・墨滅歌・1108・こひしくはしたにを思へ紫の下・ある人)

[参考]

・「…と言ひ合はせて, とこの山なると, かたみに口がたむ」 (源氏物語・紅葉賀卷)

・「とこの山なるとや, 口固めてまし」 (夜の寢覚・卷一)

17. みすのうちとのなみだども, よしのゝたきよりもながれまさりたり (527)

▽冬さむみこほらぬ水はなけれども吉野のたきはたゆるよもなし 【三】

(拾遺・冬・235・題しらず・よみ人しらず)

[参考]

・「吉野のたきにもたちまさり」 【三】 (苔の衣・秋卷)

・「吉野のたきをせかむよりも」 【三】 (恋路ゆかしき大将・卷五)

18. ひよくれんりのちぎりをたのめても (527)

▼在天願作比翼鳥, 在地願為連理枝 【小】 【三】 (白氏文集・長恨歌)

19. あしたのそこはおきうくしたまいしねやの中は (527)

▼はかなくて夢にも人を見つける夜は朝のそこぞおきうかりける 【三】

(古今・恋二・575・題しらず・素性)

[参考] 「朝の床の起き憂き」 (松浦宮・三) 【三】

20. ふるきまくらふるきふすまだに, のこらずちりのみつもりたるを (527)

▼鴛鴦瓦冷霜華重, 旧枕旧衾誰与共 【三】

(新撰朗詠集・雑・恋・733・白居易) (白氏文集・長恨歌)

[参考]

「旧き枕旧き衾, 誰とともにか」とあるところに,

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

また, 「霜の花白し」とあるところに,

君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払ひ幾夜寝ぬらむ

ひとひの花なるべし、枯れてまじれり。」 (源氏物語・葵巻)

※『源氏物語』のこのあたりの風情を踏まえていよう。

21. らくよふはしにみちてくれないをはらはず、とながやかにうちずんじたまへる
(528)

▼西宮南内多秋草 落葉満階紅不掃【小】

(新撰朗詠集・秋・前栽・279) (白氏文集・長恨歌)

22. げにぞ木のはふりしく庭のけしきを (528)

▽秋かけていひしながらもあらなくにこの葉ふりしくえにこそありけれ【三】

(新勅撰・恋二・734・秋とちぎりて侍りけるに、えあふまじきゆゑ侍りければ、業平朝臣につかはしける・よみ人しらず) (伊勢物語・九六段)

※「げにぞ」は直前の21.「らくよふはしにみちてくれないをはらはず」を受けていう。

23. さてもまだあけぬ夜のゆめとのみ思ひいるに (528)

▽故唯識論云、未得真覚、常処夢中、故仏説為生死長夜【三】

(往生要集・大文一ノ七)

24. げにおくての山だかりそめに、はかなくあぢきなきうき世のならひ (528)

▼あさ露のおくての山田かりそめにうき世中を思ひぬるかな【小】【三】

(古今・哀傷・842・おもひに侍りけるとしの秋、山でらへまかりけるみちにてよめる・貫之)

25. たゞひとつ思ひにもへはてたまいにしぞかし (528)

▼夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり【三】

(古今・恋一・544・題しらず・よみ人しらず)

26. おとゞもいまはふかきみねにうつろひ給なんかし (528)

▽郭公ふかき峰よりいでにけり外山のすそに声のおちくる

(新古今・夏・218・西行) (西行法師家集・151)

※前出 11. 「いますこしふかきみねにまかりこもるべく」 (516)

27. いなや, そのおくれさきだつ露のためしにもかけたらば (528)

▼すゑのつゆもとのしづくや世中のおくれさきだつためしなるらん【三】

(新古今・哀傷・757< 卷頭 >・題しらず・僧正遍昭) (和漢朗詠集・雑・無常・798)

▼ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがな【三】

(源氏物語・御法卷・557・光源氏)

28. そをだにのちの, とはあまりの事に (528)

▼飽かでこそ思はむ仲は離れなめそをだに後の忘れがたみに【三】

(古今・恋四・717・よみ人しらず)

29. のこりのとぼし火のかげにむかひつゝ, 夜もすがら御きやうよみ給つゝ (529)

▼秋夜長, 夜長無眠天不明, 耿耿残燈背壁影, 蕭蕭暗雨打窓声【三】

(和漢朗詠集・秋・秋夜・233・白居易) (白氏文集・新樂府・上陽白髮人)

30. ゆめは^(冷と)しりせば, とくやさもかぎりなし (530)

▼思ひつづぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを【小】【三】

(古今・恋二・552・題しらず・小野小町)

31. ほととぎすの夜ぶかきこゑばかりをともとこそ^(冷して) (536)

▼ほととぎす夜深き声を聞くのみぞ物思人のとりどころなる

(後拾遺・卷三・夏・199・道命法師)

32. とぢめはてんのちのうき世こそ (537)

※『別卷』は「後の憂き瀬」と解し, 参考として次の歌を挙げる。

▽たのめてもこの世はよしやわたり河後のうきせをとほむばかりぞ【三】

(風葉・哀傷・657・やまひしてよわうなりにけるととき, しのびてをとこに申し侍りける・やみのうつつの大納言更衣)

33. 人をばなにとかわ、とて袖をかほにをしあてゝなき給へるに (537)

※小木氏は次の歌を引歌として挙げている。『別巻』も同じ。

▼うきながら人をばえしもわすれねばかつうらみつなほぞ恋しき【小】【三】

(新古今・恋五・1363・題しらず・よみ人しらず) (伊勢物語・二二段)

※しかし、できるだけ物語の本文に則せば、次の歌が参考歌として挙がってくる。

▽身をしらで人をばなにかうらむべきとおもへばいとどなぐさめもなし

(千五百番歌合・2646・千三百二十四番 左・公継卿)

▽ことわりや人をば何とまくず原我が身をのみぞ秋の夕ぐれ

(正治初度百首・恋・780・忠良)

34. などいひしらぬ、とうちなげきて出給ぬるなごりも (537)

▼あけぬとて今はの心つくからになどいひしらぬ思ひそふらむ【小】【三】

(古今・恋三・638・題しらず・藤原国経)

35. これや我身のつひのとまりならんと心ぼそきに (537)

▼いかにせん身を浮舟の荷をおもみつひの泊りやいづこなるらん

(新古今・雑下・1706・増賀上人) (別本八代集秀逸)

36. ほととぎすのしのびねあらわれて、ことかたらふもあはれなり (537)

▼いかにして事語らはん郭公なげきの下に鳴けばかひなし

(後撰・恋六・1020・よみ人しらず)

37. 御こゝろばかりをだに、とこの山なるとおぼされば、うれしうなん侍べき (540)

※前出 16. 「と此山なり、とくちかため給へるもにくからず」 (526)

38. たゞけふかあすかの心ちして (541)

▼我が世をばけふかあすかとまつかひのなみだのたきといづれたかけむ【三】

(新古今・雑中・1651・布びきのたきみにまかりて・行平) (伊勢物語・八七段)

39. 我身につもるとし月も、げにまさり給へるを (541)

▼かぞふればわが身につもる年月を送り迎ふとなにいそぐらん【三】

(拾遺・冬・261・齋院の屏風に、十二月つごもりの夜・平兼盛)

40. をしあけがたの月ならねど (546)

▼あまのとおしあけがたの月みればうき人しもぞこひしかりける【小】【三】

(新古今・恋四・1260・題しらず・よみ人しらず)

41. まことにくらきみちのしるべかな、といみじう心うくて (546)

▼暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥に照せ山のはの月【三】

(拾遺・哀傷・1342・性空上人のもとに、よみてつかはしける・雅致女式部)

▼従冥入於冥、永不聞仏名【三】

(法華経・化城喩品)

42. たそがれ時のたどしきまぎれに (548)

▽夕やみは道たどたどし月待ちてかへれわがせこそそのまにもみん【三】

(古今六帖・題一・天・夕闇・371・大宅娘女)

43. よしや、たちにし我な、と何とありとても (549)

▼群鳥のたちにしわが名今更に事なしぶともしるしあらめや【三】

(古今・恋三・674・題しらず・よみ人しらず)

44. たづきもしらぬ山のおくに (551)

▼をちこちのたつきもしらぬ山なかにおぼつかなくもよぶこどりかな【三】

(古今・春上・29・題しらず・よみ人しらず)

45. 月のひかりばかりやかかわらぬふしみのさととながめ給ふも (551)

▽わするなよよの契をすがはらやふしみのさとの有明の空【小】

(千載・恋三・839・俊成) (長秋詠藻・後朝恋・520)

※他にもっとふさわしい参考歌があるかと思われるが未詳。

46. 心をいたましむる色となりにければ (551)

▼行宮見月傷心色 夜雨聞猿断腸声【小】

(和漢朗詠集・恋・780・白居易)(白氏文集・長恨歌)

47. よるのゆめぢにともなうさるのこへなどはきゝならはず (551)

▽胡雁一声 秋破商客之夢 巴猿三叫 曉霑行人之裳【三】

(和漢朗詠集・猿・457・大江朝綱)

48. 山のあらしにとこさへて (551)

▼昔おもふさよの寢覚めの床さえて涙もこほる袖の上かな【三】

(新古今・冬・629・冬歌とてよみ侍りける・守覚法親王)(正治初度百首・冬・372)

49. 春ともしらぬなみだのつらゝ (551)

※「涙のつらら」は前出・卷二73.「いとどなみだのつららもまくらのうへにとちかさねつつ」(397)。

▽年くれし涙のつららとけにけり苔の袖にも春やたつらん

(新古今・雑上・1436〈巻頭〉・俊成)(長秋詠藻・485)

▽鶯の涙のつらら声ながら便りにさそへ春の山水

(六百番歌合・春上・32・十六番右持・寂蓮)

▽鶯の涙のつららうちとけて古巢ながらや春をしるらん

(新古今・春上・31・惟明親王)

▽たれかまたなみだのつららそでさえてしもよの月にもものおもふらん

(続古今・冬・614・関白前左大臣家百首に・行家)

※『別巻』は参考として上の新古今・春上・31・惟明親王の歌を挙げる。

50. かたしきわぶる夜なへをば (551)

[参考]

▽いかにせむかたしきわぶる冬のよのとくるまもなき袖のつららを【三】

(風葉・冬・401・女をおやのとりこめて侍りけるに、しのびてまかりながらなげきあかして・ささわけしあさの関白)

51. 思ひねにたゞすこしまどろむともなきゆめに (551)

[参考]

▽君をのみ思ひねにねし夢なればわが心から見つるなりけり

(古今・恋二・608・題しらず・躬恒)

52. 八のまきのおく, そくわうとそつてんじやうみろくぼさつ, などいふわたりを
(551)

▼「即往兜率天上 弥勒菩薩所」(法華経・普賢菩薩勸発品第二十八)

※参考『狭衣物語』(新全集) 卷二・54頁。ただし流布本は異なる。

53. ふぢごろも露なれたる松のとほそのうちに (551)

▼奥山の松のとほそをまれにあけてまだ見ぬ花の顔を見るかな【三】

(源氏物語・若紫卷・53・聖)

※前出7.「まつのとほそをたち出ゝ」(451)

卷五

1. 花になれぬるたびの空は, こしかた物うき御心ちにて (571)

※『別卷』は参考として次の歌を挙げる。

▽あかざりし花になれたるから衣心のほかにかふるけふかな【三】

(堀河百首・更衣・334・肥後)

▽旅衣きさらぎ弥生日数へて花になれたる袖の上かな【三】

(建仁元年仙洞句題五十首・羈中花・85・後鳥羽院)

2. ものうちのたまはせたる御け色などは, 千とせきくともあく世あるまじく (572)

▽春霞たなびく山の桜花みれどもあかぬ君にもあるかな【三】

(古今・恋四・684・題知らず・友則)

3. むかしはなをうらみぬそであるべうもなかりしを (572)

▼あしのねのうきみのほどとしりぬればうらみぬそでもなみはたちけり【小】【三】

(後拾遺・恋四・771・中納言定頼がもとにつかはしける・公円法師母)

4. 花の色―ひもときわたりて (576)

▼ももくさの花のひもとく秋ののを思ひたはれむ人などがめそ【三】

(古今・秋上・246・題しらず・よみ人しらず)

▼秋の野の花の色色とりすゑてわが衣手にうつしてしかな【三】

(拾遺・雑秋・1099・題しらず・よみ人しらず)

5. 露の下ばも月のひかりもひとつにかゝやく心地して (576)

※「露のしたば」について『別巻』は未詳とする。典拠あるか。

6. おぎの上風はぎの下露 (576)

▼あきはなほゆふまぐれこそただならねをぎのうはかぜはぎのしたつゆ【三】

(和漢朗詠集・秋・秋興・229・義孝少将)(義孝集・4・あきのゆふぐれ)

7. さるはつゆのほだしと思ふべきこともなきを (582)

▽なにかその露のほだしにあらぬ身も君とまるべきこの世ならねば (馬内侍集・33)

※『源氏物語』に次のようにある。

「今なむつゆのほだし亡くなりたるを、これかれ、かくて、ありしよりけに目馴らす人々の今はとて行き別れむほどこそ、今ひときはの心乱れぬべけれ。」(幻巻)

※上について池田亀鑑『源氏物語事典』以下は、次の古今集歌を引歌として挙げる。

▽世のうきめ見えぬ山路へいらむには思ふ人こそほだしなりけれ

(古今・雑下・955・同じ文字なき歌・物部良名)

8. へだてつるせきをあながちにもうらみたまはず (598)

▽彦星に恋はまさりぬ天の河へだつる関をいまはやめてよ【三】 (伊勢物語・九五段)

卷六

1. ふるからをのゝもとの心は、あらはれてしのちは (609)

▼いそのかみふるからをののもとがしは本の心はわすられなく【小】【三】

(古今・雑上・886・題しらず・よみ人しらず)

2. 君にひかれて、とか。よろづ世までもあらまほしく (615)

▼ちとせまでかぎれる松もけふよりは君にひかれて万代やへむ【小】【三】

(拾遺・春・24・入道式部卿のみこの、子の日し侍りける所に・大中臣能宣)

3. きりはれやらぬのべのあさつゆに (616)

[参考]

▽おほかたの秋をあはれとなくしかのなみだなるらしのべのあさつゆ

(新勅撰・秋下・308・建保五年四月庚申五首歌, 秋朝・六条入道前太政大臣)

▽女良花夜はの名残やふかからんまだ立ちのかぬ野べのあさ露

(正治初度百首・秋・841・隆房)

4. 風ふくのべのいとすゝきよりもみだれやすく (618)

※「いとすすき」は新古今時代の歌語。「いとすすき」の本意を踏まえる。

▽いとすすき吹きなみだりそ野辺の風はたおる虫にまかせてをみむ

(拾玉集・秋二十三首・348)

▽(長歌) …あらしの風のはげしさにみだれしのべのいとすすき…

(長秋詠藻・581)

※他には教長・拾玉・山家・長秋・清輔・拾員外のみ。

※『別巻』は次の歌を参考として挙げる。

▽ながむればかぜふく野辺の露にだにやどりもはてぬいなづまのかげ【三】

(六百番歌合・秋・336・十八番右〈負〉・家隆)(壬二集・328)

▽白露のたまぬきかくるいとすすきふきなみだりそやまおろしの風【三】

(袋草紙・下巻・古今歌合難・514・藤原忠隆)

5. ならばぬすきへしさも、さすが月に心やあくがれけん (618)

▼あきのよの月にこころのあくがれてくもゐにものを思ふころかな【三】

(詞花・秋・106・寛和二年内裏歌合によませ給ける・花山院)

6. へだつる夜なへは、くるしまでの御心ちにて (623)

▽衣だになかに有りしはうとかりきあはぬ夜をさへへだてつるかな【三】

(拾遺・恋三・798・題しらず・よみ人しらず)

▽わかくさのにひたまくらをまきそめてよをやへだてんにくからなくに【三】

(古今六帖・雑の思ひ・一夜隔つ・2749)(万葉集・2542, 2547)

7. 下ばにかれ行のべのけしきこそ、さかりの色よりもおかしくみゆれ (623)

[参考]

▽しぐれつつかれ行く野辺の花なれば霜のまがきにほふ色かな【三】

(新古今・冬・621・うへのをのこども、菊あはせし侍りけるついでに・延喜御歌)

8. 月ののべふくかぜにつけても (625)

※「のべふくかぜ～」は次の二首のみ。

▽かすみたつ野辺吹く風も寒からでわがみのよそに春はたちぬる

(元真集・333・朱雀院にて)

▽いほりさす野べ吹く風にむらぎえてをのへのかねの声ぞ物うき

(拾玉集・889・野亭聞鐘)

9. 物や思ふともいわぬにしる人も物したまはず (625)

▽あさぢふのをののしの原しのぶとも人しるらめやいふ人なしに【小】

(古今・恋一・505・題しらず・よみ人しらず)

※しかし、物語の本文に則せば、次の歌が挙がろう。

▼しのぶれど色にいでにけりわが恋は物や思ふと人のとふまで【三】

(拾遺・恋一・622・天曆御時歌合・平兼盛)

▽うき身にはたえぬ思ひにおもなれて物や思ふととふ人もなし

(長明集・64・不被知人恋)

[参考]

▽いかにせむいはぬ色なるはななれば心の中を知る人もなし【三】

※その他、「げにぞ知る人なかりける」「心一つに思ひこがれたまふを知る人なし」(以上、狭衣物語・巻一)。また、「心のうちを知る人なし」【三】(あきぎり・上)。

10. あふせに身をかへけんちやうぶんせいは (625)

※『唐物語』第九話を典拠としよう。

▼恋ひわぶる底の水屑となりぬれば逢瀬くやしきものにぞありける 【小】 【三】

11. もらすけぶりのたよりもやと……それもむろの八しまにもあらぬにや (626)

▼いかにせんむろのや島にやどもがな恋のけぶりをそらにまがへん 【小】

(千載・恋一・703〈卷末〉・忍恋を・俊成) (長秋詠藻・忍恋・500)

卷七

1. ふみみず, はてはたへにしおだへのはしも (635)

▼陸奥のをだえの橋やこれならむふみみふまずみ心まどはす 【小】 【三】

(後拾遺・恋三・751・またおなじところにむすびつけさせ侍ける・道雅)

(栄花物語・ゆふしで・133) (定家八代抄・恋三・1112)

2. むしのこゑへみだれあいたるに (638)

※『別巻』は次の歌を参考として挙げる。

▽さまざまに心ぞとまるみやぎ野の花のいろいろむしのこゑごゑ 【三】

(千載・秋上・256・堀河院御時, 百首歌たてまつりける時よめる・俊頼)

3. わらわべのとのいすがたなまめかしく, もくさの花よりもけに見へて (638)

▼ももくさの花のひもとく秋のを思ひたはれむ人などがめそ 【三】

(古今・秋上・246・題しらず・よみ人しらず)

4. おのづからゑいをなす (640)

▼松樹千年終是朽, 槿花一日自為栄 【小】 【三】 (和漢朗詠集・秋・槿・291・白楽天)

[参考] 『恋路ゆかしき大将』 卷二にも用いられている。【三】

5. ことのはごとにおくつゆや, とながめ入つゝ (641)

▼あはれてふ事のはごとにおくつゆは昔をこふる涙なりけり 【小】 【三】

(古今・雑下・940・題しらず・よみ人しらず) (定家八代抄・雑上・1545)

[参考]

▽見るたびにそでぞぬれけるたまづさのことのはごとにつゆやおくらん

(あきぎり・上・18・中宮)

6. いつをいつとなり へすれば (647)

成信重家ら出家し侍りけるころ、左大弁行成がもとにいひつかはしける

▽思ひし人も有りける世の中をいつをいつとてすぐすなるらん

(拾遺・哀傷・1335・公任)(後拾遺・雑三・1031)(公任集・226)(宝物集・111)

※上は『今昔物語集』「公任大納言於白川家読和歌語第卅四」にも出。

依他のやつのとひを人人よみけるに、この身かげろふのごとしといへることをよめる

▽いつをいつとおもひたゆみてかげろふのかげろふほどのよをすぐすらん【三】

(金葉〈二度本〉・雑下・641・懷尋法師)(金葉〈三奉本〉にも)

(宝物集・112〈先の公任歌と並ぶ〉)

人にたのめて、おもひにあはれなればいふ

▽たのめてもはかなくのみぞおもほゆるいつをいつともしらぬいのちを

(和泉式部集・761)

▽見初めてし日よりたものかわかねばいつをいつとかまたんとすらん

(堀河百首・恋十首・不逢恋・1164・永縁)

※『風に紅葉』にも次のように見える。

(若やかなる女房)「いつをいつと、かくてはおはしまさんぞや。人々の申しはべりし分も、さまでの事やははべる。これほどなごり久しかるべき事にやははべる」など、うち嘆きて言ふ気色、…(卷二)

※小木氏は「見なれないことばである」といい、「[いつをいつということなく]の略であろう」とする。辛島正雄氏「校注『風に紅葉』一卷二一」の注は、「[いつをいつと]は定型句で、いつを限りの時と、の意」として、金葉集の懷尋法師の歌を掲げる。『別巻』も同様だが、『いはでしのぶ』の例を挙げていない。しかし、和歌の例としてむしろ掲げるべきは公任歌であろう。とくに成信・重家の出家に際しての歌であり、『いはでしのぶ』作者も知っているものと思う。もちろん、これが典拠というのではない。和歌の用例では、出家遁世に関わることが多いが、辛島氏のいうように、定型句にはほ

かならないであろう。

7. かひなき見るめばかりだに、このたびはかげたへたるよ、など (651)

※『別巻』は参考として次の歌を挙げる。

▽影たえておぼつかなさのますかがみ見ずはわが身のうさもしられじ【三】

(拾遺・恋四・915・くにもちがむすめをとみつまかりさりてのち、かがみを返しつかはすとて、かきつけてつかはしける・よみ人しらず)

8. たちいで給ふ心ち、身をわくるなどもいへばさらなり (655)

※これをそのまま引歌と見るとき、『新編国歌大観』では次の二首のみ。

とほきくににまかりける人に、たびのぐつかはしける、かがみのはこのうらにかきつけてつかはしける

▼身をわくる事のかたさにます鏡影ばかりをぞ君にそへつる

(後撰・離別・1314・おほくぼののりよし) (古今六帖・かがみ・3225)

▽みをわくる人もかへりてたまのとをやがとちけむほどをこそおもへ

(入道右大臣集〈頼宗〉・法華経廿八品歌・100・囑累)

※小木氏は、古今・離別・373の、

▽おもへども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる

を解釈の参考として挙げるが、しっくりしない。この場合、上の後撰集歌を引歌と見てよいであろう。もっとも定型句と言えなくもない。

9. 我のみつらきなげきそひたる心ち、ありしにもあらずあさましく心うかりけり (656)

※『別巻』は次の歌を参考として挙げる。

▽袖のうへにあまる涙の紅に我のみつらき小野の浅茅生【三】

(在明の別・卷二・67・中務宮の上)

▽ほととぎす鳴きていづくに過ぎぬらむ我のみつらきしののめの空【三】

(風葉・恋五・1071・しのびて御らむぜられける女のもとにて、あかつきほととぎすのなきわたるをきかせ給ひて・たいの先帝の御歌)

[参考]

▽しばしとも人はとどめぬ別ぢの我のみつらきあかつきの空

(続千載・恋三・1351・別恋を・寂恵)

▽忘れめやみしはむかしの夢なれど我のみつらきさなの松ばら

(宝治百首・恋二十首・2688・信覚)

※『新編国歌大観』中、「我のみつらき」は上の四首のみ。すべて中世の用例である。

卷八

1. うきにおもなれ行世の中を (667)

▽うきたびの身のあらましにおもなれて住むこちする山のおくかな

(洞院撰政家百首・1664・光俊)(玉葉集・2226・山家の心を)

※前出「まことにうきにもつらきにも、あまたおもなれ給へれば」 (巻五・597)

※他出「うきにはおもなれたるあまごろもの御袖は、たえがたきまでぞ見えける。」

(冷泉本・4ウ)

▽うき身にはたえぬ思ひにおもなれて物や思ふととふ人もなし

(長明集・64・不被知人恋)

2. 又さへきぬる春の色も、花のもとはいつまでと心ぼそく (667)

※『別巻』は次の歌を参考として挙げる。

▽春ごとに花のさかりはありなめどあひ見む事はいのちなりけり【三】

(古今・春下・97・題しらず・よみ人しらず)

3. 風のおとなひは、いとゞ身にしみかへり、かなしき物と思ひしりても (667)

▼おほかたの秋くるからにわが身こそかなしき物と思ひしりぬれ【小】【三】

(古今・秋上・185・題しらず・よみ人しらず)

4. おきふしみだるゝおぎの上風に、はぎの下ばもいとゞうらがれて (667)

▼あきはなほゆふまぐれこそただならねをぎのうはかぜはぎのしたつゆ【三】

(和漢朗詠集・秋・秋興・229・義孝)(義孝集・あきのゆふぐれ)

▽我が恋はにはのむらはぎうらがれて人をも身をも秋のゆふぐれ

（新古今・恋四・1322・恋歌とてよみ侍りける・慈円）

▼うらがれてしたばいろづくあき萩のつゆちるかぜにうづらなくなり

（続古今・秋下・486・題しらず・俊成女）（千五百番歌合・1419）

※小木氏は「それぞれ引歌もあろうが、いずれも詩歌文章に言い古るされたことであるので、省略する」という。

5. 露をぬきかくるさゝがにのいと物はかなさなどを（667）

▼秋ののにおくしらつゆは玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ【三】

（古今・秋上・225・是貞のみこの家の歌合によめる・文屋あさやす）

▽白露を玉にぬくやとささがにの花にも葉にもいとをみなへし

（古今・物名・437・をみなへし・友則）

▽ささがにのいとどはかなき露といへど松にかかれればひさしかりけり

（和泉式部続集・162・松の木にくものいかきたるに、つゆのおきたるをみて）

▽かぜをまつほどもはかなししらつゆのたまぬきかくるささがにのいと

（如願法師集・詠百首和歌・雑・340）

6. 我身一にながめ入給へる夕つかた（667）

▼月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど【小】【三】

（古今・秋上・193・これさだのみこの家の歌合によめる・大江千里）

7. うさこそまされみよしのゝ、などやうなるふるごと（672）

▼世にふればうさこそまされみよしののいはのかけみちふみならしてむ【小】【三】

（古今・雑下・951・題しらず・よみ人しらず）

8. 色なき風にだにもろきなみだは（672）

▼吹きくれば身もしみける秋風を色なき物と思ひけるかな【小】

（古今六帖・31301・友則）（続古今・秋上・306・秋歌中に・初句「ふきよれば」）

▼物おもへば色なき風もなかりけり身にしむ秋の心ならひに【三】

（新古今・哀傷・797・堀河院かくれ給ひて後、神無月、風の音あはれにきこえければ・雅実）

9. 心にかへてとか (672)

※小木氏は消極的ながら次の歌を挙げる。『別巻』も同歌を挙げる。

▽けふのまの心にかへておもひやれながめつつのみすぐす月日を【小】【三】

(新勅撰・恋一・642・返し・和泉式部)(和泉式部日記・第五句「すぐす心を」)

※しかしこれは、「大かたにながむる秋の夕べをも心にかへてあやしとやみる」(巻八・272・大将)という作中歌の物語内引歌であろう。

10. ありてうき世とかさねてもあぢきなく (684)

▽おとにのみききこしたきもけふぞ見るありてうき世のそでやおとると

(続後撰・雑上・1013・定家)

▽苔ふかきいはやの床の村時雨よそにきかばやありて浮世を (拾遺愚草・2425)

▽そむくべきことわりなくは何をかは有てうき世のなぐさめにせん

(続後拾遺・雑下・1184・読人しらず)

※参考「(源氏宮ハ) ありて憂き世はなど、今日ぞはじめて思し知られける。」

(狭衣物語〈大系〉・巻一)

※他出「ありてうき世の、とのみおぼしとりし女院の…」 (冷泉本・21ウ)

※小木氏は「適当な引歌はないが、当時の思潮を表わすことわざであったことであろう」とし、

▽のこりなくちるぞめでたき桜花ありて世中はてのうければ【小】【三】

(古今・春下・71・題しらず・よみ人しらず)

に脈を引いているのかもしれない、とする。『別巻』は参考として挙げている。

※『狭衣物語』も諸注、出典未詳とする。『いはでしのぶ』は、『狭衣』の文と定家の詞を踏まえるか。

11. いふにもあまることのはも (684)

[参考]

▽七車積むともつきじ思ふにも言ふにもあまるわが恋草は【三】 (狭衣物語・巻四)

12. きおん入むいとおぼす心のたぐひはことなるに (687)

▼流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、眞実報恩者【三】 (出家作法)

13. まきのいたどもたれゆへかわ, といらへたるほど (687)

▽君やこむ我やゆかむのいさよひにまきのいたどもささずねにけり【小】【三】

(古今・恋四・690・題しらず・よみ人しらず)

▼山ざとのまきのいたどもささざりきたのめし人をまちしよひより【小】

(後撰・恋一・589・をとこのこむとてござりければ・よみ人しらず)

▽悔しくもあけてけるかな槇の戸をやすらひにこそあるべかりけれ【三】

(狭衣物語・卷二・48・狭衣)

14. げにも又ふく風よりもけに人の心をなびかすめり (687)

[参考]

▽すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり【三】

(古今・恋四・708・題しらず・よみ人しらず)

▽うらかぜになびきにけりなさとあまのたくものけぶり心よわさは【三】

(後拾遺・恋二・706・かたらひ侍けるをむなのことひとにもいふとききてつかはしける・実方)

15. さだめてねすりの心も色に出ゝ思ひざまなる御中にこそ (690)

▼こひしくはしたにをおもへ紫のねずりの衣色にいつなゆめ【小】【三】

(古今・恋三・652・題しらず・よみ人しらず)

16. ひかるげんじだに, こわすてがたし, とかのたまいければにや (691)

▼憂きふしも忘れずながら呉竹の子は捨てがたきものにぞありける【小】【三】

(源氏物語・横笛卷・514・光源氏)

17. なれなくいそ, といひけん人の心の中まで (697)

※「なれなゝらいそ」の誤写と見る。

三条院東宮とまうしける時, 法師にまかりなりて, みやのうちにたてまつり侍りける
藤原統理

▼きみに人なれなならひそおく山にいりてののちはわびしかりけり【三】

(後拾遺・雑三・1032)(今鏡・昔語り・真の道)(発心集・卷五・七)

※『別巻』も当該歌を挙げる。統理の出家談は『今鏡』（昔語り・真の道）、『発心集』（巻五・七）、『寂恵法師文』にも引かれる。また『拾遺集』（1336）公任歌に見える。しかし『今鏡』（藤波の中）には藤原惟成の出家した時の歌としてある。なお『今昔物語集』（巻十九第十）は類話か。

18. まことに、あいもおもわぬもゝしきを、なれど（697）

▼わかるれどあひもおもはぬももしきをみざらんことのなにかなしき【小】【三】
 （伊勢集・239）（寛平御集・16・第四句「見ざらむ事や」）（大鏡・66・伊勢の君・第四句「みざらんことや」）（古今六帖・1251・ていじのみかど・第四句「みざらんことや」）（後撰・離別・1322・第二句「あひもをしまぬ」第四句「見ざらん事や」）（大和物語・第一段・第二句「あひもをしまぬ」）

[参考]

・「「あひも思はぬ」と言ひける人の心の中も思ひ知られて、顧みがちにて出でたまひぬ。」

【三】（苔の衣・秋巻）

・「伊勢の御が「あひも思はぬももしきを」といひけんふるごとさへ、今の心ちして心細くおほゆ。」（増鏡・おりある雲）

19. いく千世みるともあく世あるまじくおぼへ給ふを（702）

▽春霞たなびく山の桜花みれどもあかぬ君にもあるかな【三】
（古今・恋四・684・題知らず・友則）

20. まづしるなみだをためらひつゝ（702）

▼世中のうきもつらきもつけなくにまづしる物はなみだなりけり【小】【三】
（古今・雑下・941・題しらず・よみ人しらず）

21. なに事につけても、げにかぎりなかるべき人の山ぐちなれば（705）

▽人よりも思ひのぼれる君なればうべ山口はしるくぞありける【三】
（河海抄・松風巻）

22. その水くきのあとばかり, うきになかれて御めにとゞまらぬならいとしりながら
(709)

※小木氏は次の歌が作者の念頭にあったかという。『別巻』も同じ。

▽なべてよのうきになかるるあやめ草けふまでかかるねはいかがみる 【小】 【三】

(新古今・夏・223・詞書略・上東門院小少将)

[参考]

▽さみだれはゆくべきみちのあてもなしをざさがはらもうきにながれて

(山家集・夏・あるところにさみだれの歌十五首よみ侍りに, 人にかはりて・226)

23. あたりのもくずともなさまほしければ (709)

▽よるべなみかかる渚にうち寄せて海人も尋ねぬ藻屑とぞ見し 【三】

(源氏物語・行幸卷・398・光源氏)

24. なさけは人の, とかは (709)

▼とへかしななさけは人の身のためをうき我とても心やはなき 【小】 【三】

(山家集・雑・恋百十首・1285) (続古今・恋五・1338)

※『別巻』は参考として挙げる。

25. いづくをしのぶ, とていといたうなき給ふに (710)

▼わびはつる時さへ物の悲しきはいづこをしのぶ涙なるらむ 【三】

(古今・恋五・813・題しらず・よみ人しらず)

▽うしと思ふものから人のこひしきはいづこをしのぶ心なるらん 【小】

(拾遺・恋二・731・題しらず・よみ人しらず) (重出歌・恋五・944)

※直前の和歌に「いかゞかなしき」とあること, また「なき給ふ」とつらなることから
は, 『別巻』が指摘する古今集歌が引歌として認められよう。が, 場面としては, 拾
遺集歌を引き合わせると, 文脈が豊かになるようだ。

[参考]

▽うきはなほいづくをしのぶ身ぞとだに思ひしらする人伝もがな

(壬二集・為家卿家百首・恋廿五・1320) (同・恋歌あまたよみ侍りに・2917)

▽おしかへしいづくをしのぶ涙ぞとおもへばいとどぬるるそでかな

(続後撰・恋四・869・〈恋歌の中に〉・尚侍家中納言)

▽あはれまたいづくをしのぶこころとてうきをかたみにぬるるたもとぞ

(為家千首・恋二百首・633)

26. 御うしろの、かくるゝまで、心ぐるしくぞ見をくりきこへける (710)

[参考]

▽君がすむやどのこずゑのゆくゆくとかくるるまでにかへりみしはや【三】

(拾遺・別・351・ながされ侍りてのち、いひおこせて侍りける・菅原道真)

※この場合、特に引歌を想定するほどではないか。

27. ふしみのさとゝいひながらに、人おともせず (713)

▼いざここにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし【小】

(古今・雑下・981・題しらず・よみ人しらず)

▼菅原や伏見の里のあれしよりかよひし人の跡もたえにき【小】

(後撰・恋六・1024・菅原のおほいまうちぎみの家に侍りける女にかよひ侍りけるをとこ、なかつたえて又とひて侍りければ・よみ人しらず)

[参考]

※「伏見」のイメージ・荒れ果てて荒涼とし寒々とした雰囲気。

▽なにとなく物ぞかなしきすがはらやふしみのさとの秋の夕ぐれ

(千載・秋上・260・題しらず・俊頼)

▽わするなよよの契をすがはらやふしみのさとの有明の空

(千載・恋三・839〈巻末〉・〈後朝恋〉・俊成)(長秋詠藻・520)

▽夢かよふみちさへたえぬ呉竹のふしみの里の雪の下をれ

(新古今・冬・673・おなじ家にて、所名をさぐりて冬歌よませ侍りけるに、伏見里雪を・有家)

▽すが原やふしみのさとのあれ枕ゆふかひもなき草の霜かな

(壬二集・院百首・恋・882)

▽あれにけるふしみの里のあさぢはらむなしき露のかかる袖かな

(式子内親王集・正治百首歌たてまつりける時・362)

28. いへばゑにかなしく (713)

▼いへばえにいはねば胸にさわがれて心ひとつに嘆くころかな【小】

(伊勢物語・三四段)

※前出・卷一 48. 68. (173, 206)

29. よもぎがそまになみだをつくしつゝ (713)

▼なげやなげよもぎがそまのきりぎりすすぎゆく秋はげにぞかなしき【小】【三】

(後拾遺・秋上・273・題しらず・曾禰好忠)

冷泉家本

1. あながちに十市の里ならぬうれしさもおぼされず (e ウ)

▼暮ればとく行きて語らむ逢ふことのとをちの里は住み憂かりしも

(拾遺・雑賀・1197・春日使にまかりて、帰りてすなはち女のもとに遣はしける・伊尹)

(拾遺抄・雑上・460) (一条摂政御集・38) (大鏡・伊尹伝)

2. そもさはりおほみにて、何となくて日数はつもりつつ (e ウ)

▼港入りの葦分け小舟さはり多み我が思ふ人に逢はぬ頃かな

(拾遺・恋四・853・題知らず・人麿)

※上の拾遺集歌の下の句を響かせよう。

[参考]

「あしわけのほどもことはりならぬにはあらねど」

(在明の別・卷二)

3. 雲井のよそにいかなる御おもかげとだにおぼつかなき (16 ウ)

▼限なき雲のよそにわかるとも人を心におくらさむやは

(古今・離別・367・題しらず・よみ人しらず)

[参考] 『松陰中納言』・卷二・芦の屋にも出【三】

4. なれはまさらぬ御気色を (16 ウ)

▼みかりするかりばのをのならばのなれはまさらでこひぞまされる

(新古今・1050・題しらず・人麿) (万葉・相聞・3048)

[参考]

「(歌略) 馴れはまさらぬ, などあるも, いつのほどにかと, をかしく御覧ず」

(海人の刈藻・巻一)

※いずれも, 人麿歌の末句「こひぞまされる」を言外に響かせる。

※前出, 巻一 52. 「などかいたうかりばのおのにのみはなりまさり給」(193)

[参考]

「狩場の小野になりゆきたまふを」

(狭衣物語〈新全集〉・巻二)

5. なしはらなる御目移り (18 ウ)

▼君ばかりおほゆるひとはなしはらのむまや出でこむたぐひなきかな

(俊頼髓脳・28) (夫木抄・三十一・駅・14884・よみ人しらず)

※前出, 巻二 14. 「宮の御事はなをなしはらにのみおもひいできこえ給つゝ」(296), 巻二 122. 「げにかのなしはらなるかたつかたに」(444)

6. ありてうき世の (21 ウ)

▽おとにのみききこしたきもけふぞ見るありてうき世のそでやおとると

(続後撰・雑上・1013・定家)

▽苔ふかきいはやの床の村時雨よそにきかばやありて浮世を

(拾遺愚草・2425)

▽そむくべきことわりなくは何をかは有てうき世のなぐさめにせん

(続後拾遺・雑下・1184・読人しらず)

※前出, 巻八 10. 「ありてうき世とかさねてもあぢきなく」(684)

[参考] 「ありて憂き世はなど, 今日ぞはじめて思し知られける。」

(狭衣物語〈新全集〉・巻一)

(以上, 巻三～八, 冷泉家本終わり)

Study of Authority in *Iwade-shinobu* (3~8, Reizeikebon)

Hiroshi YOKOMIZO

As previous study about the authority of representation of waka on *Iwade-shinobu*, “*Iwade-shinobu Monogatari Honmon to Kenkyu*” (Ogi Takashi, Kasama shoin, 1977), “*Kamakura jidai monogatari shusei bekkan*” (Ichiko Teiji, Misumi Youichi, Kasama shoin, 2001), is beneficial.

This note is intended to be with reference to these studies, looking for a new authority Waka representation, assembled them. In which for each authority, pointed out that in the order of progression of the story. This is the first time, it is expected to be published sequentially.